

大阪会場（西日本地区）テーマフォーラム

- ◆モデレーター：宮本倫明（西日本地区担当実行副委員長）
- ◆総合司会：間藤芳樹（Mash 代表）
- ◆テーマ：万博の価値と形の変容探求～バンパクノカタチ
- ◆実施内容

①開会挨拶

（登壇者）

橋爪紳也 イベント学会副会長（大阪府立大学教授）

（内容）

橋爪副会長より、西日本地区本部大阪会場テーマフォーラムの開会あいさつ及び、下記招待者4名を紹介。

岩田 泰（公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会 企画局長）

堺井 啓公（公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会 広報戦略局 局長兼総務局上席審議役）

中野 伸一（大阪府政策企画部 万博協力室 理事）

柳生 小夜（大阪府政策企画部 万博協力室 参事（事業調整担当））

②第1セッション「バンパクのカタチ」

（モデレーター）

宮本倫明（Landa 代表）

（パネリスト）

石川勝（大阪・関西万博運営プロデューサー）

橋爪紳也（大阪府立大学教授）

（内容）

1970 年大阪万博から 2005 年愛知万博までの社会変化として、冷戦の時代、大衆の出現、グローバル化の幕開けなどが挙げられ、これに対して 2025 年までの予想される変化として、SNS の登場、それによる大衆の消失、With コロナ時代の生活観、仕事観、世界観などニューノーマルへの適応が求められるとの認識がなされた。また、石川は、万博という行事の性格について「公共性」と「興行性」を両立させる事業構造であることや、宮本からは地球的課題の解決に向けた取組みや成果を世界に伝える場としての役割と期待がますます大きくなってきているとの指摘があり、このことがコミュニケーション技術の進化と相まって、バーチャル空間でのバンパクのあり方に大きな変化をもたらすとの予測がなされた。最後に、万博に限らずイベントや様々な事業が、かつて「主催者」と「来場者」の2項により成立していた状況が、その間に存在する「参加者（プレイヤー）」の出現によりイベントや事業の構造が「主催者」と「来場者」「参加者（プレイヤー）」という3項に変化してきていることが強調された。

このことは、地域振興や観光振興イベントにおいて、地域のプレイヤーを育て、主役にしていくという流れとも同根で、万博協会が「共創パートナー」「TEAM EXP02025」で展開するプレイヤーの発掘にも繋がってきている。今後の万博事業の運営において、それら個々の共創を取りまとめて大きなうねりにつなげていく手腕が問われている。現在、基本計画を策定中で、今後新しい動きが活発化してくると思われる。招待者から「TEAM EXP02025」にイベント学会としてプロジェクトを企画、提案していくことも検討しては、

という提案があり、具体的に検討していこうという結びとなった。

③第2セッション「バンパクのコミュニケーション」

(モデレーター)

鴨志田由貴 (京都芸術大学)

(パネリスト)

牧村真史 (2005 愛地球博事業運営チーフプロデューサー)

榎場博文 (HIKKY顧問)

青木俊介 (ユカイ工学 CEO) ⇨東京オフィスリモート参加

(内容)

With コロナが今後のすべてのイベントに関わってくる事柄であり、コロナを無視したイベント開催というのは非現実的である。

今回は既存のコミュニケーションと未来のコミュニケーションとしたかったが、コロナを含む今後感染症対策が行われている上でおこなわれるイベントというものは今後ハイブリット型で行われていくのが日常になっていくのははないか？という問いに対して、現在まで行われてきたコミュニケーションとして牧村氏を招聘し、現在までの万博をプロデュースしてきた立場から、新しいコミュニケーションのあり方として榎場氏が現在「学会・地方イベント・展示会」などで使用され始めている「VR プラットフォーム」での展示会のあり方を提示。VR 展示会を同時並行で行われるものではなく「プレ万博」という位置づけで動機づけをおこなうツールとしての展開を提示することで、新たな万博含めたイベントの開催方法となるのではないか？というものと同時に今回シッポでの感情表現が特徴のコミュニケーションロボットを開発した青木氏も招聘。ロボットを媒介にコミュニケーションの研究をおこなっている立場から、VR 空間などが活用されると、失われがちな触れ合うコミュニケーションを、今後遠隔でのコミュニケーションで触れ合いを創出するロボットなどを媒介とすることでその問題が解決するかどうか？という問いがなされた。

リアル・オンラインそれぞれの良いところは活かしつつ、+ロボットなどの媒介で不足分を補うイベント開催のあり方を提起したテーマで終えることができた。

④第3セッション「バンパクの関西レガシー」

(モデレーター)

信時正人 ((株) エックス都市研究所理事)

(パネリスト)

川井徳子 (ノブレスグループ代表)

二之湯真士 (京都府議会議員)

(内容)

関西で行う万博として、膨大な歴史や文化の資産を誇る関西の特徴を大いに生かしていくことが必要不可欠なことではないか、という発想でこのテーマを選んだ。量的質的に世界に誇りうる資産をベースに展開することによって、この万博が大いなる価値を生み、世界に対して関西の魅力を発信するだけでなく、人類が、混沌たる 21 世紀を駆け抜けていくための大いなるヒントを与えていくことになるのではないかと考える。

登場した三人は、これまで、イベント学会で ICOMOS (国際記念物遺跡会議) の総会を誘致しようと研究してきた。

信時は、関西の世界遺産（二府四県）や国宝・重文の集積、有形無形の文化遺産の存在をプレゼンし、タイミング的にも、文化庁の京都移転や日本における世界文化遺産登録30周年などの流れからも2025年における万博での関西レガシー取り上げの意義を述べた。

奈良から登場の川井は、人類史・神話から振り返る…という題名にて、奈良の平城京よりも古い大阪の難波宮に言及し、世界最古の企業（金剛組、土建）、世界最古の木造建築（法隆寺や四天王寺）の存在、さらに防災に寄与する冗長性を伊勢神宮等式年遷宮が代表しているとした。日本は土建国家だと言う言葉が印象的だった。

二之湯は京都府議会議員。これまでの日本の歴史に大いに貢献してきた秦氏の研究を自ら行ってきており、その成果から導く京都のレガシーを述べた。1000年の首都として「交流」が進み「淘汰」され、「普遍性」のあるものが残った原理が働く京都。秦氏によって関西の歴史がつながり芳醇な日本文化の発信になると説いた。色んなものを受容し変化してきた大阪・関西の代表としての秦氏学であった。



⑤セッションまとめ

（登壇者）

石川勝（大阪・関西万博運営プロデューサー）

宮本倫明（Landa 代表）

（内容）

大阪・関西万博を主題に、国際博覧会の存在意義や開催意義の観点から「バンパクのカタチ」について議論し、ICT技術の進化による「バンパクのコミュニケーション」の可能性について実際にバーチャル会議の手法を取り入れ、さらに関西が持つ歴史的資源や文化遺伝子を世界コンテンツ化していく手法などについて熱く対話を進めてきた。2025年に向けて関西・大阪、日本を大いに盛り上げていこうという結びでテーマセッションを終了した。

来年の次回研究大会の大阪開催について橋爪副会長より案内。



⑥エクスカーショ ン コスプレ・アミューズメント「ハコスタ」見学
(内容)

会場から徒歩2分の場所にある、ビル1棟全部をコスプレイヤーのための写真・動画撮影の貸しスタジオ事業を行っている「ハコスタ」を2班に別れて見学。コスプレの貸し衣装やメイクなども行っており、コロナ以前は海外からのインバウンドにも人気であったが、見学当日も数組の利用者で賑わっていた。

